



日記「少数意見」

— 1 0 読書編 —

JUN

2002年2月12日(火) 「わが人生の時の人々」 (石原慎太郎著)

私は石原慎太郎の本をほとんど読んでおり、石原ファンをもって自認していた。しかし、この本を読んでその気持がさめていくのを感じた。石原の語り口は特に変わったわけではないが、突然老醜が気になった。要するにこの本は、自分がいかにすごいことをやって、大物に気に入られ、強敵と戦ったかという自慢話に尽きる。しかし、傲慢不遜は石原の代名詞のようなもので、今までよかったものがなぜ突然許せなくなったのか。

参議院に300万票をとって当選したとき新聞に、自分ほど首相にふさわしい人間はいないと書いたが、あれは痛快だった。そのとき彼はまだ36才だった。年功序列の日本社会において若手が虚勢を張って老人支配に挑戦する姿はさわやかだ。しかし、それから40年近くの歳月が流れ、権力のひとつの要にいる石原が同じ言葉をはいても印象は違って来る。さらに同じ自慢にしても30代のそれと60代では意味が違って来るように思える。30代の自慢は視線が未来に向かっているので自慢が本来もつ醜さが隠される。60代の自慢はこれと異なり、自分がため込んだ財宝を見せびらかすようないやらしさがある。語っている人間が美しさを失っているからかもしれない。

昔、黒澤明監督の自慢話を聞きながら、なぜ世界が天才、巨匠と認める人が取り巻き相手に同じ自慢話を繰り返し、聞き飽きたはずの賞賛を確認しなければならないのか不思議だった。石原も同じような状況にあるのではないか。

三島由起夫は「豊穡の海」の第4巻「天人五衰」で老醜をテーマにした。石原は「わが人生の時の人々」の中で三島の晩年の作品における才能の枯渇に言及していたが、反対に三島は現在の石原がはまっている罫を彼の最後の作品で予言していたのではないか。

2002年7月29日(月) 老いてこそ人生

69才の石原慎太郎が自分の老いについて語った本である。

石原はこの本のなかで何回か三島由起夫に言及している。長くなるが引用する。

「ヘミングウェイの自殺と違って、自衛隊の師団本部に乱入しクーデタをそそのかす演説をぶち、呼応せぬ相手を見て自決してしまった彼の挙動に悲劇性がまったく感じられず、リアリティー

が欠けてどこか滑稽にさえ感じられるのは、彼が保有していた肉体が肉体として機能することのないしょせんフェイクなものでしかなかったから、老いによってそれを失うという恐ろしさを感じさせ得ない肉体でしかなかったからです。つまり三島氏は結果として肉体が老いて衰退していくという実感を持ち得なかった。三島氏は老いることの本当の口惜しさ、恐ろしさを実は知ることが出来なかった。彼がそれを知っていたなら彼の文学は死んでしまう前のように突然の衰退を示しはしなかったと思います」

これを読んで不愉快になった。石原のように元々肉体に恵まれた人間に、三島のように必死の努力の末フェイクかもしれないが見られる肉体を獲得した人間の気持が分かるか。以前別の本で石原が「ボディービルでは身長は伸びない」とっていたことを思いだし、さらに不愉快になり、本を投げ出した。

でも数日後、また本を手に取り読み出した。そして最後の部分に次の文章があった。それは、石原が防衛庁の高官から極秘裏に見せてもらった写真についての記述であった。

「撮したのは自衛隊の撮影班で、三島さんたちに気づかれないように外側に立てた脚立に乗って欄間ごしに証拠写真として部屋の中の様子を撮りまくった。そこに部屋の中で率いた楯の会の会員たちにあれこれ指図している三島さんが写っている。もうその後数分で割腹自決する三島さんのその顔というのが、澄みに澄んで、実にさわやかで平明ななんとも美しいものでした」

「死ぬことを決めてしまった人間というのは、覚りきったという以上に、こんなに清明な顔になれるのかと思わず感嘆するほどだった」

実はこの写真の話は以前確か日経新聞に載った石原の随筆で読んだことがあったのだが、あらためて三島さんに読ませてあげたかったと思うと、涙が出た。でも最期の三島はスターでも有名人でもなく、自分を見ているもう一人の自分もいない、無名のテロリストだったのだろう。だから自分の写真にも興味がなく、自分がどう見えるかにも関心がなく、立派に死ぬことだけを考えていたのだろう。

この本を読み終わって、結局石原も老いと死については私と同じくらい困惑し当惑していることが分かり、親しみを感じた。

2002年9月20日(金) 最近の小説

結局出版されなかったが、長編小説らしきものを書いてから他人の小説を読む意欲が薄れてきた。流行の小説を手取るのだが、50ページも読まないうちにいやになり放り投げてしまう。こ

れまで看過していたような細部に引っかかってしまうのだ。

幸田真音の「有利子」という経済小説を読み始めた。主人公の財前有利子は証券会社の個人客向け投資アドバイザーである。その有利子のところに2500万円のキャッシュを持ち込み1週間で倍にしてくれと三条という老人がやってくる。それは無理だという有利子に対して三条は「見掛け倒しもいいところだ」と非難する。キレた有利子は「三条様」というのをやめて突然「じいさん」と呼ぶ。

いくらなんでも客に対して「じいさん」はないだろうと私は思う。ため口を否定するわけではないけど、ため口が可愛いのは下の者が上の者に向かって言う場合で、有利子は投資のプロであり相手は金持かもしれないが素人の老人である。テレビ番組で老人に「おじいさん」と呼びかけるのが失礼なことだと言われる昨今、有利子の態度は非礼以外のなにものでもない。作者はこれが面白いと思っているのかもしれないが、そのような感覚の持ち主が書く小説はロクなものではない、と思い読むのをやめた。

昔だったらこんな小説でも読み続けていたかもしれないが、細部をおろそかにする人間には立派な小説は書けないと言う認識に至ったので、無駄な時間を使わなくなってよかったと思っている。しかし最近の小説はこの類の欠陥品が多い。

今、すばらしい作品だと思って読んでいるのが倉橋由美子の「よもつひらさか往還」で、言葉の重みが違う。ふと、倉橋由美子と川上弘美の文体が似ているように感じたが、文芸評論などでこの二人を論じたものなどあるだろうか。

2003年9月15日(月) グロテスク

東電OL事件とオウム事件を下敷きに慶応女子高校らしき高校を舞台にした桐野夏生の小説。3分の1ほどは真面目に読んだが、全く人間が描けていないと思いあとは読み飛ばした。

作品評をする気もないが、東電OLを利用していることについては文句を言いたい。この小説では当該OLは佐藤和恵という名前を与えられており、おぞましい存在として描かれている。著者は故人の人権をなんと考えているのだろう。

「宴のあと」事件で東京地裁は「私生活上の事実のみでなく事実らしく受け取られるおそれのあることから」を公開することもプライバシーの侵害になると判じている。作品の芸術性が当然に違法性を阻却するわけではない。「宴のあと」事件の有田八郎は元外務大臣で東京都知事選の候

補でもあったので公的な人物として私生活が公表されることがやむをえないともいえた。これに反し東電OLは私人であり犯罪の被害者だった。三島由起夫は有田を悪意をもって描いたのではなく、むしろ読者は有田に好感を持つようになったはずだ。それでも裁判所は三島に損害賠償を命じた。

桐野夏生は、この作品を当該OLの母親がどのような気持で読むと考えたのか、考えなかったのか。作家というのは因果な商売だ。

2004年3月25日(木) 芥川賞の2作品

「蛇にピアス」は身体を傷つけることに興味がないので、あまり面白くなかった。「蹴りたい背中」は、社会に適応しない女の子の話で、これはよく理解できた。

小説はどんなテーマを選ぼうが結局自分を描くことになる。とくに今回の2作品は、何れも作者自身を書いた私小説のようだ。

「蹴りたい背中」の主人公の、社会に適応している人間に対する敵意と嫌悪感は激しく、こんなに正直に書いていいのかと心配になった。一般的には「蛇にピアス」の方が反社会的と思われているようだが、そうではない。「蛇にピアス」の主人公は相手を選ぶが結局仲間がいないと生きていけない人だ。そして、異端の集団の方がその中の人間関係は親密なのだ。

「蹴りたい背中」の主人公は、どんな社会にいても自分と他人の間に壁をつくる。それは壁というより社会と自分の組成の違いで、細胞と体液の違いで、社会という細胞を接着させて体液を交換しながら生きている生命体への生理的な嫌悪感なのだ。

作者の孤高と痛みが伝わってくるいい作品だ。

2008年5月24日(土) 自死という生き方

「自死という生き方―覚悟して逝った哲学者」は65歳で自殺した須原一秀の遺稿を編集した本で双葉社から出ている。まだ途中だが、著者の思想には共鳴するが行動は特異だ。彼は、老醜と苦痛に満ちた自然死を避けるために心身とも健全な時に自死することを提唱しそれを実践した。

最近、高校の同級生と大学のサークルの先輩が相次いで肺がんで死んだ。特に高校の友人は去年

ガンであることが分かった直後に連絡をもらい、何回も会っている。最後に会ったのは死ぬ一ヶ月前で、そのとき彼は「俺はもう死んでもいいと思うようになったよ」と言った。私は言葉に詰まったが「親戚に10年以上寝たきりの人が何人もいるが、何れみんなそんなことになるから早く死んだ方がいいと俺も思う」と正直に思っていることを述べた。彼はちょっと安心した表情を浮かべた。

彼は、入院してから一週間で死んだが、入院の前日まで会社に行って、その前の週にはラグビーの試合の審判を勤めたそうだ。そこまでは充実した人生の最後でいいのだが、入院してからのことを想像するとつらい。

肺がんは呼吸が出来なくなって死ぬが、その苦しみは緩和することが難しいという。呼吸困難な状態が苦痛なのでそれを取り除くということは死を意味する。緩慢な溺死と言われているが、それが一週間続くのは地獄ではないか。

彼が入院した時、医者は回復が不可能であることは分かっただろう。その先の治療は死を先延ばしにする効果しかない。それは即耐え難い苦痛を長引かせることだ。そんな状態で死を選択できるのであれば、ほとんどの人がそうするだろう。でも日本の医療ではその選択肢はない。医者 の責務としては出来るだけ長く生かせることしかない。それは結果として人生の最後を悲惨なものにする。

医者 の論理としては、肺の細胞がほとんどがん細胞になっても回復する可能性はゼロではないというのだろう。でもそれは生命が絶対的な価値を持つという間違っ た考えに基づく教条主義だ。生が無限大の価値を持ち死がゼロであればその考えもいいだろう。しかし生は永遠ではなく死は必ず来る。生命はいわば賞味期限のある商品なのだ。80年生きられる人は60歳になれば生命という商品を4分の3費消している。

人生の価値をその間の快と不快とのバランスシートで考えてみれば理解しやすい。肺がんで死に掛かっている60歳の人の最大限の余生が20年だと考えよう。その間得られる快は多分それまでの人生で得られた快の割合より少なくなるだろう。それでも人生全体の快の合計が1000単位として残りの人生に100単位が得られるとしよう。しかし、治療により回復する可能性が1%であれば得られる快の可能性は1単位でしかない。その1単位の快を得るために想像を絶する苦痛に耐える価値があるか。さらにその苦痛の結果100のうち99は死であればなおさらだ。

須原一秀氏は、人生が下降線をたどる前に死を選択することを提唱している。人間は本来楽天的な生き物で、自分だけは天寿を全うして安らかな死を迎えることが出来ると思っている。しかし、周りを見ればそんな人はほとんどいない。

2010年1月4日(月) 100年予測

ジョージ・フリードマン著、早川書房。

地政学に基づき2050年の日米戦争を予測する本。

地政学のみで未来の世界史を予測するのは危ういが、切れ味のよい論理には興奮した。

フリードマンによれば、歴史が繰り返すことは地政学で証明される。2050年の日米戦争は1941年の太平洋戦争の再現ということになる。

昨日のテレビで見た「ETV特集選 日本と朝鮮半島2000年」はその説を裏付けているように思えた。第7回「東シナ海の光と影・倭寇の実像を探る」と第8回「豊臣秀吉の朝鮮侵略」を続けて見たが、知らないことが多かった。

倭寇については、海賊であることぐらいしか知らなかったが、500艘の船に1600頭の馬を乗せ南朝鮮の内陸深く攻め込んでいったそうだ。海賊というより軍隊だ。

秀吉についても、その朝鮮侵略が世界史を変えるほどの大事件だとは知らなかった。

この二つの侵略に加えて日韓併合があったので、侵略は少なくとも3回繰り返されたのだ。地政学からしても、日本が海外に侵出する場合には朝鮮半島がその経路になることは素人にも明白だ。朝鮮半島の人々が4回目の侵略を恐れるのは当然だ。

日本はここ60年ぐらい大人しくしているが、歴史から見れば好戦的な国だ。自虐的史観ということだけでなく、日本人は自分の先祖がこれまで世界に対して何をしてきたかをもっと知るべきだろう。そうしないと日本の未来は見えてこない。